

栃台開拓物語

開拓民の数奇な歩みと無住の地に建つ開墾記念碑

(戸沢村教育委員会共有課 出典：戸沢村史、古口歴史探訪)

1.開拓の始まり

三ツ沢集落から西北西12kmの国有林内(通称 屋敷沢)に、栃台と俗称されていた開拓地があった。

開墾の始まりは大正 10(1921)年 と言われているが、当初の入植者は、立谷沢村(現在の庄内町で旧立川町南部地域)の人達为中心で、13家族が山奥に入り畑地を開墾したことから始まった。

大変な苦勞により開墾が進み、大豆などの豆類は良く取れたが、家計収入の中心は「炭焼き」だった。

山形新聞 (昭和7年7月17日付)では、「古口三里の山奥に珍しい原始的部落 国政調査で発見した十六戸 漸く文教場を作る」との見出で、「大正 14. 5 年ごろ立谷沢村より密かに移住してきたので、古口村役場でもこんな山奥に人家のあることすら知らず一昨年の国政調査で初めて発見されたのであって、全部落が一家族制度となって総ての生産品は部落民共有のものとされている全くの原始的な珍しい部落である。」と報じられたほどに、世間からはほとんど注目されることなく、言わば隔絶された状態で生活を営んできたものであったらしい。

入植年次については、資料により若干異なるが、当初は庄内側からの農繁期だけの、今でいう通勤耕作から始まったものといわれ、やがて新天地へ夢を託して



(表)		(裏)	
相馬金蔵君	両氏当地開墾ノ有望ナルヲ認メ	発起人(三名)	氏名 略
功七級勲七等	率先事ニ当リ拮据苦心ヲ盡瘁シ	世話人(四名)	同 右
長南仁吉君	ノ結果燦然其ノ事ヲ開キ其ノ実	連中名(十四名)	同 右
	ヲ結ビ今日ニ至リテ皆其ノ福ヲ	神職(一名)	同 右
	享ケ鼓腹洋洋タリ吁両氏ノ功績		
	永ク銘スベキ也		
			昭和四年月建立

集落こぞっての移民となった訳である。

昭和7（1932）年7月、栃台分教場が設置されたが、これは開拓者一同の結束、努力の結果ではあったほか、開墾の中心人物 相馬金蔵、長南仁吉両氏に負うところが大きいとされている。

2. 相馬金蔵と長南仁吉

両氏は、標高240mの「栃台開拓地」の開祖とされている。

栃台集落は、大正9年 東田川郡立谷沢村の門脇清蔵等17名によって作られたもので、彼らは国有林の払い下げ、長南玄吉をリーダーに「製炭」を行う傍ら開墾を進め、粒々辛苦の結果、昭和4年には住宅のほか、分校・公会堂（現在の集落公民館？）も建つほどになったという。



栃 台 集 落

相馬金蔵、長南仁吉も同郷（立谷沢村）の人であるが、相馬金蔵の子孫（相馬まつみ氏 古口歴史探訪編纂時存命）に聞くと、両氏は栃台開拓の有望なることを考え、他に率先して開拓事業に当たり、関係筋（営林署など）への交渉等に東奔西走し、未知から成功へと導いたという。

住民は、両氏の功績を称え、感謝をこめて、長南玄吉、秋保源次郎、大江慈導（僧侶）氏らを発起人として、昭和29年、開拓団解散（当時の団員9名）に合わせ彼らの顕彰碑を建立した。

顕彰碑に関しては所在もわからず、また、山形新聞（昭和62年10月14日付）では、入植者子孫の発意により、開拓記念碑の脇に慰霊柱を建立したとあるが、こちらも30有余年の時の流れとともに朽ち果てたものと思われる。

3. 満州移民と引揚げ

満州（現 中華人民共和国東北地方）への進出は、日露戦争（1850～55）以降、活発になり、日本帝国主義的施策により昭和7年に「満州国」が作られ、満州国移民が国策として進められた。

最上郡内で満州開拓移民送出の計画が本格化したのは、昭和14（1939）年7月からで、満州に第二の最上郡である“満州最上郷”を築こうとしたのである。



そんな中、栃台住民が集落を挙げての満州移民を決意するに至ったいきさつとしては、

（1）5～6年前と比べ、組合協同積立金の増加などにより経済好転の兆しは見出せるが、これが集落（部落）更生運動の成果かどうかで考えて見ると、その大半は農林水産物の価格上昇であり、このことがいつまで続くのかを考慮すると、更生運動の根本問題の解決は未だに、と感じる。

（2）栃台集落の現在収入の7～8割までが製炭だが、製炭資材（広葉樹？）伐採跡地には年々スギが造林され、（資材確保の）範囲は縮小しており、また、国有林野施業経営案により、木炭の資材払下げ量についても限度の状態となっている。

（3）その他、二・三男の将来に対する問題、教育問題、医療設備の問題、結婚の問題等を考慮すると、（このままで）生きがいある輝かしい人生を送り得るであろうか、と「栃台分

教

場経営」（鈴木富雄氏稿）には記されており、土地問題や人口問題を解決する方策が満州農業集団移民だったのです。

そして昭和16（1941）、南満州の奉天省昌図県桜桃村に入植したが、その地は豊穡で広大であり、開拓地は順調に進展したが、突如として移民者にとっては晴天の霹靂ともいふべき事態が起こった。すなわち、昭和20（1945）年8月の旧ソビエト連邦軍の対日参戦と太平洋戦争

の敗戦であり、移民者達は開拓地からの引揚げを余儀なくされたのである。

4. 栃台再入植と再び無人の里へ

敗戦により、翌年2月に帰国した旧栃台住民は、山形県庁の強力な勧めもあり、満州移民後、数年の放置ですっかり荒無地と化していた栃台に再び入り開拓を行うことにしたが、既に山形



から食糧増産隊10名が入植しており
彼らに合流する形となったという。

「家を建てる時は野原にゴザを敷いて寝た。沢の近くに寝たときは蚊がいて寝られたものではなかった。」「学校どころの騒ぎでない。住む家さ~~え~~なく、満州に行く前から建っていた神社の中に泊まりました。それでも入りきれないので神社の前に蚊帳を吊って寝た。家を建てたときに学校も建ててくれたが、屋根もカヤ、熨斗建てもカヤ、庭にカヤを敷いたのが教室で暗くて暗くて勉強なんかできなかった。集落の大人が教師代わりとなって教えてくれました。その後、教師が来る前に学校はやっとりっぱになった。」と当時の分校生の作文（旧古口小学校編 七つの分校の子どもたち）や「栃台開拓部落について」（元分校教員 西嶋一春氏編）に記されているように、何もかもが無い状態での再入植であったことが伺われる。

その後、やはりと言うべきか、電気もない非常に厳しい生活環境だけでなく、頼みの田畑も気温と水温の低さ、日照時間の不足、痩せ地、傾斜地などなどの悪条件のため、入植者自身が「ここでは作物は良く育つはずがない。」というほどの耕作不適地であった。このため、旧古口村役場でも「古口村農業振興計画（昭和26（1951）年10月）」により、家畜（役牛、乳牛、

緬

（メ）羊）の導入による営農計画を立てたが、入植者は既に現金収入となる「炭焼き」に大きく依存しており、また、その後の社会状況の激変（エネルギーの石油化？）により離村が相次いだことから、昭和29（1954）年に古口小学校栃台分校が廃止され、翌30年、栃台は再び、無人の里に帰してしまったのである。

現在、開墾跡地には三ツ沢林道から自動車で約1時間の道のりであるが、開道以前は高屋より山道を歩いて2時間余りを要した。林道からの風景は急峻な山々が連なり、人工林と天然樹木が入り混じるも、深山の中に引き込まれるようであり、途中、名も知れぬ名瀑も顔を出す。



2019（令和1）年5月29日、森林管理署職員と「栃台」に足を踏み入れ、開拓の痕跡を探しましたが、林道脇に記念碑と山の神を祀った石碑があるのみで、植林によるスギと藪のため、当時の面影を探し当てることはできませんでした。

その代り、林内に入った早々ヤブ蚊の大群に纏わりつかれ、軍手の上からも刺されたことから、大変痒い思いをし、入植当時の難儀の一端を実感するものとなりました。

栃台に行くには、「蚊対策」を十分に講じられるよう絶対！お勧めします。

